

作者プロフィール 瀬田萬之助（大正十二年〈一九二三〉～昭和二十年〈一九四五〉）北町生まれ。瀬田栄之助の弟。昭和十六年四月、東京外国語学校支那語貿易科に入学。昭和十八年十二月一日入営。昭和二十年三月七日、フィリピンのルソン島付近にて戦病死。陸軍少尉。享年二十一歳。

⑩ 瀬田栄之助「別れ霜」抄（創作集『いのちある日に』講談社、昭和四十五年）

「……そのことについて答える前に、いったいぜんたい、戦争そのものがよろしくない。パパの反戦の理論はすこぶる簡単……戦争は人間が人間を殺す極悪な犯罪であるからなんだ。戦争にはぜったい大義名分なんてあろうはずがない。正義に反する嘘っぱちな屁理屈があるばかりだ。戦争はむごったらしい殺戮であるがゆえに一大罪悪であるというパパの主張は荒削りだが、あらゆる思想に優先する。戦争は唯の遊戯じゃない。このことは兵士として戦争を実体験してきたパパの痛烈な叫びであり、悲願であり、厳粛なる確信なんだ……」

俊介はあえぐ息づかいのもとに言葉を強めていった――。

「パパは戦争の協力者ではなかったけれど、参加者だった……ファシズムと兵役を強制されたご時勢だったから致し方なかったんだ……しかし、パパはあのおとき反戦の勇気が持てなかったことを生涯の恥辱としている。その点、万ちゃんは偉かったと思うよ……」

俊介は今次大戦に学徒兵としてフィリッピンに出征し、ルソン島で戦死する直前、戦争憎悪の遺書をめんめんと書き残していった弟の万之助の思い出に松明（たいまつ）の火を燃やした。彼の遺書は他の多くの反戦学徒兵の手記とともに一本にまとめられ、ベストセラーズとなった。ごく最近では本多顕彰氏の推薦で高校二年の『現代国語』に収録されていた。

「万おじさんはどんなひとだった？」

由紀子は小頸をかしげて訊いた。

「そりゃ純粹そのもののような男だったな。東京外語のシナ語科の学生だったころは蒸留水という渾名（あだな）をつけられていたぐらいだからね。パパはいつも思うのだけれど、万ちゃんのような純粹な男は、戦後の汚濁の世界ではとても生息不可能だったろうなア……生まれたときから弟はきれいな死にかたをするように運命づけられていたんだ……」

「おばあちゃんはお布団のなかで、万おじさんの写真を大事そうに抱いていたわね」

とめは臥床すると、茶の間に掲げられてあった万之助の遺影をはずさせて、床のなかにいれ、片時も躰から離そうとはしなかった。

とめに死の徴候がまだ現われぬ前、戦争の残虐行為への憎しみの意識はいちだんと尖鋭化していて、見舞客の誰彼をつかまえては、身の毛もよ立つようなか細い声でとめはこう訴えるのが常であった。

「……なア、こんな罪咎（つみとが）もない可愛い子が何で殺されんならんのですやろ……万之助はそれはそれは気立てのやさしい子でした。あれは小学校のときでしたかなア、野の虫にも親や子もあるのやから、先生に叱られてもええ、宿題の昆虫採集はでけんちゅうてとうとうやらんじまいじゃった。出征の前の晩なんか、わたしの布団にはいってきて、今生（こんじょう）の思い出に母さんのお乳を吸わしてくれというて、このしなびたお乳を吸いよるんじゃがな、とてもとてとも万之助は鉄砲持って人殺しのできる子じゃなかったで……」

俊介はそのころから、とめに気づかれないようにそつととめの声を丹念にテープレコーダーに録音していた。

「……万之助や、万之助！ いまにわたしもおまえのところへまいらせてもらうからね……もうちょっと待って置いておくれ……」

とめは譫言（うわごと）の状態で昼夜をわかつた、同じ文句を繰返したものだ

——。

重ったい痰で咽喉をつまらせながら、蒼黒く浮腫（むく）んだ顔をゆがめながら最愛の息子と別世界での団欒を望むのあまり、一刻も早い生命の終焉を自ら祈るようなとめの叫喚は哀れでならなかった。

そして、とめが枢車のきしみの音を聞くようになり、カワラケツメイやドクダミの繁茂する、いつもじめじめとしめったあの薄暗い靄に包まれた墳塋（おくつき）を意識し出すころになると、

「息子をかえせ！ ……息子をかえせ！！ ……」

の、とめの絶叫は、前にも増して、鋼鉄（はがね）のごとき冷たさと鋭さを加え、「……息子をかえせ」のただ一点だけにしぼった悲しい死の前奏曲をなんども繰返すのだった——。

⑪ 加藤静枝「生かされて 六十首」抄（『ルソン哭泣 従軍看護婦の手記』  
私家版、平成八年）

髪と爪を母に送りて従軍せり四十三年前看護婦として

かつきて落伍せる君と別れ来しルソンの山を今も思ひぬ

坑道は水漬き寂しくしずまりぬ日も見ず逝きし傷兵あはれ